

参考資料



2025 年 6 月 6 日

日本イーライリリー株式会社

〒651-0086
神戸市中央区磯上通 5-1-28
www.lilly.com/jp

第 15 回「リリー・オンコロジー・オン・キャンパス がんと生きる、わたしの物語。」 受賞作品詳細

●受賞者一覧

以下、敬称略

部門	賞	お名前	ふりがな	在住地域	作品タイトル
絵画	最優秀賞	中井 智子	なかい ともこ	愛知県	来週の約束
	優秀賞	黒田 順子	くろだ よりこ	東京都	私を守る翼
	入選	伊藤 瑞穂	いとう みずほ	東京都	夕暮れ空の記憶
		谷口 佳江	たにぐち よしえ	千葉県	ダイヤモンド
写真	最優秀賞	轟 穂乃佳	とどろき ほのか	岐阜県	父のレンズ
	優秀賞	北川 知彦	きたがわ ともひこ	神奈川県	挑戦
	入選	長谷川 勝士	はせがわ かつし	兵庫県	壁を越える
		山中 章平	やまなか あきひら	石川県	版画干支カレンダーを続ける
絵手紙	最優秀賞	齋藤 紘子	さいとう ひろこ	神奈川県	伝える事で役に立つ
	優秀賞	久保谷 喜枝子	くぼや きえこ	茨城県	この笑顔なくさず生きていこう
	入選	八木 宏昌	やぎ ひろまさ	愛媛県	母ちゃんの笑顔
		福田 友里恵	ふくだ ゆりえ	兵庫県	弱くて強い、母へ

●受賞作品、エッセイ(抜粋)

【絵画部門】

【最優秀賞】

中井 智子(なかい ともこ) <愛知県>



『来週の約束』

ある日、耳が痛んだ父が受診すると、お医者様から、「外耳道がんですね。このままなにもしなかったら、もって二年です。」と余命宣告があった。手術をして退院した後は、週末に父と母と私の三人で畑仕事をするのが生活スタイルとなった。また、夕食時ぐらいだった家族の会話が、畑仕事帰りの車内で、来週の話をするようになった。世間一般的には、ただの来週の予定。私には、余命宣告された父と来週の約束ができるという幸せな時をかみしめられる時間。自分のことながら、この数ヶ月間で家族の有り難みを感じられるようになった心境の変化には驚いた。父ががんになったことは良くないことだが、家族との在り方を考え直す良いきっかけとなった。一年中楽しめるように作られている畑。毎週「来週の約束」を穏やかに積み重ねて、未来があると信じて共に歩いていこう。

【優秀賞】

黒田 順子(くろだ よりこ) <東京都>



『私を守る翼』

「悪性リンパ腫です」
医師が検査結果を伝えてくれました。まだ生まれて4か月の娘はベビーカーの中で眠っています。元々、子宮頸部腺癌の状態で娘を出産することも、自分より生まれてくる子どもの命を優先しようと覚悟して決めたことでした。私が一日でも長く愛情深く娘を守り続けないと…私はまた命がけで、どんな困難も受け入れる覚悟をしました。癌になるということは、癌だけが自分を襲うのではないのです。周りからの偏見の目、そして世の中から自分だけが取り残されてしまっているような疎外感や孤独感。でも、私は闘病20年を迎え、娘も成人式を迎えることができました。病状が安定したきっかけは、小さな頃から大好きだった絵を描きだしたことでした。「どうしても最後に絵が描きたい」その思いが、私の人生を180度変えました。今でも癌は怖いですが、でも、この絵のように、私は天使の翼で守られているのだと思います。またどんな困難が私を襲おうとも、自分自身が輝ける何かをするということは、天使の翼が自分を守ってくれることだと信じています。

【入選】

伊藤 瑞穂(いとう みずほ) <東京都>

**『夕暮れ空の記憶』**

母が癌を宣告された。まさか。どうして。
あの時、ああしていればこうしていれば—
if ばかり浮かんでは消えて、ぐちゃぐちゃになって、
病院の帰り道は空が滲んでよく見えなかった。
母の治療が始まってから、一緒に過ごす時間と同じくらい空を見上げる機会が増えた。
いつか母がいなくなっても、太陽は昇りまた沈む。
けど、赤や橙、群青が溶け合う空に刻々と形を変える雲— 同じ空は二度とない。
振り返れば、震災も経験したし家族がバラバラにもなった。その度に『人生とは何か?』と考えた。
ただ生きているだけで命は尊いこと。世界は奇跡で満ちていること。いつも近くで支えてくれる人の存在。当たり前になりすぎて忘れていた大切なことを母の病が思い出させてくれた。
母と苦楽を共にする二階建て2DK は、午後を過ぎるとベランダから強い西陽が差し込む。洗濯物を取り込む時に見える一番星が好きだった。時間が経っても、この空をちゃんと思い出せるだろうか。

【入選】

谷口 佳江(たにぐち よしえ) <千葉県>

**『ダイヤモンド』**

乳がんの告知は突然で、一気に色の無い世界に落ちた。悩む間もなく始まった治療、育児、仕事、家事。どうやって生きてきたのかわからないほど滅茶苦茶な日々。今も続く副作用に苦しんで、生きるための治療をもう終えたいと思う事もある。
一日一日いまを生きて…絵を描いたり、好きな音楽を聴いたりして、なんとか日常を取り戻してきた。
抗がん剤治療中も、ウィッグを被ってライブへ行った。ライブ中、唄を聴くと家族を想って号泣した。
告知から5年の歳月が過ぎ、娘が小学生になった時、ライブの全国ツアーと一緒に回った。ツアーのファイナルは、全摘から5年後の夫の誕生日。
会場をバックに、娘が私たちにスマホを向けた。
5年前号泣した唄を、5年後に同じ場所で、3人で聴いた。
振り返ると、感謝と奇跡の5年間だった。
もう何も無いと絶望した日から、ずっと命は輝いてくれていた。輝かせようとしたのではなく、ただただ、一生懸命に生きてきて、今があった。
楽しいことも、辛いことも、全て丸ごと抱きしめる。それが「人が生きる」ことなのだと、がんになってわかった。
どの命も、みんなキラキラと輝いている。いつか終わるその日まで、その輝きを抱きしめて生きていきたい。

【写真部門】

【最優秀賞】

轟 穂乃佳(とどろき ほのか) <岐阜県>



『父のレンズ』

父が、ひと月の間に、五回も交通事故を起こした。検査の結果は、「神経膠腫(グリオーマ)」。治療により一命を取り留めたが、視野の左側を失った。その後、家の中では、父がよくぶつかる場所には赤い印を付け、机の角や柱には赤ちゃん用の保護クッションを付けた。

父は、今まで何でも一人でこなしてきたからか、「一人でできる！」と意地を張った。それでも見えない壁にぶつかり物を落とすと、母と私は胸が痛んだ。ある日、リビングに向かうと、父が遠くを見つめ、今にも何かが弾けてしまいそうな顔をしていた。私は父の左頬にそっと手を当てた。「辛いの？」

父は何も言わずに、見えない左側から私を探した。そして深く呼吸をし、また遠くを見つめた。父の目から大粒の涙がこぼれ落ちた。私は咄嗟にカメラを手にした。ファインダー越しに見る父は、とても美しかった。抱える辛さ、悲しみ、家族への愛、そして力強い生命力、そのすべてが凝縮されているように感じた。その時、私は父を通して、写真の真の意味を知った。それは単に目の前の光景を記録するものではなく、人の心を写し出すものなのだ。

【優秀賞】

北川 知彦(きたがわ ともひこ) <神奈川県>



『挑戦』

2014年の夏に癌が見つかった。「なんで俺が？」すぐに手術で癌を取り除き、5年が過ぎ寛解となったが、6年後の2020年夏に再発が見つかった。最初の手術の時と違ったのは、成長した子供たちに癌のことや治療のことを詳しく説明できたこと。

「覚悟」をしなければいけないんだと思ったからだ。再手術後、ストマを取り付け何ができるか模索し始めたが、再再発が見つかった。「覚悟」していた筈なのに、逃げ出したくなる時もあった。

リハビリを続けストマとの付き合いにも慣れてきた2021年夏にコロナに罹り、治療のため、全身麻酔で人口呼吸器を付け10日間生死を彷徨った。一からリハビリを再開し、出来るようになることが徐々に増えてきたころ、障害者スポーツに巡り合い、目標に向かって「挑戦」するきっかけができた。

2023年、2024年と連続でパラ国体に出場することができた。満足できる成績ではなかったが、皆が応援してくれていたことが本当に嬉しかった。そのおかげでまた「挑戦」する気持ちが湧いてきた。癌は進行しているが「挑戦」を続けてやろうと思う。

【入選】

長谷川 勝士(はせがわ かつし) <兵庫県>

**『壁を越える』**

慢性リンパ性白血病と診断されてから、今年で9年。病気を宣言された当初は「あとのくらい生きられるのか」と不安が押し寄せた。しかし、次の年には、妻と一緒にベルリンの壁を訪れていた。

私はその場所を実際に自分の目で見てみたかった。癌になったことで、「やりたいことをしよう」という思いが一層強くなったのだと思う。

ベルリンの壁があった地面の上で、私と妻のスニーカーが並んだ写真を撮った瞬間、込み上げてきた感情があった。あ那时的の自分は、白血病という「壁」を背負いながらも、それを越えようとする意志で満ちていたのかもしれない。

あれから10年。なんとか元気に生きてこられた。ベルリンの壁を訪れたことは、単なる観光ではなく、「壁を越える」ということの象徴だった。あの場所に立ち、写真を撮った瞬間、私は自分の人生の壁を越えられるという小さな確信を得たのだと思う。

この10年は、簡単なものではなかったが、私を支えてくれる家族や友人、医師の存在があった。

ベルリンの壁のように、どんな壁もいずれ崩れ去ることを信じて、今日もまた一歩を踏み出す。

【入選】

山中 章平(やまなか あきひら) <石川県>

**『版画干支カレンダーを続ける』**

ガンになっても続けている事がある。それは版画干支カレンダーを作ること。きっかけは、子供が学校で作ってきた版画カレンダーの味わいある感じが、とてもいいなと思ったから。作り始めて三年目の秋。胸と背中と骨が痛くなって病院に行くと、ガンだった。悪性リンパ腫でステージ4。気持ちの整理も追いつかないまま入院して治療が始まった。

抗がん剤治療は副作用が辛く、「もう版画干支カレンダーは作れない。」と一度はあきらめた。でも、止めると何もかも全てが終わりになってしまう気がした。やっぱり頑張ってチャレンジしようと思った。

作った版画干支カレンダーを先生や病院へお渡しすると喜んでくれた。談話コーナーにカレンダーを掲げると、毎日、みんなが眺めてくれた。生きている証をもらった気がして、残りの治療も頑張れた。

治療後、寛解することができたが、再発の恐れがある病気なので、維持治療を続けることとなった。つまり、ガンとは一生付き合っていくということだ。

今年もお世話になった先生や病院へカレンダーを届けて、元気に過ごしていますと挨拶をする。

ガンを消滅させるのではなく、ガンと一緒に生きて、一年また一年と、版画干支カレンダーを作り続けていこうと思う。

【絵手紙部門】

【最優秀賞】

齋藤 紘子(さいとう ひろこ) <神奈川県>

『伝える事で役に立つ』



私が乳がんを告知されたのは、31歳の時でした。その頃友人は結婚や出産で幸せそうな時期でしたので、自分がとても惨めで不運に感じていました。今は元気に過ごしていますが、14年経った今年、なんと私の姉も乳がんになってしまったのです！幸い早期発見だったので手術だけで済み、早々に治療を終える事ができました。

私が乳がんになったので、姉も欠かさず乳がん検診を受けており、私が治療を乗り越えた姿を見て、治療の流れも聞くことができたので、とても心強かったと感謝してくれました。

今まで私は乳がんになってしまった自分を否定的に感じ、誰にも言えずにいたのですが、自分の辛かった経験も、隠すのではなく伝えていけば、知識という立派な贈り物になることに気づきました。

乳がん検診を受診すること、罹患してしまったとしても、正しく治療を受ければ、必要以上に怖がる事はないと伝えたいです。

大丈夫！不安なのはあなただけじゃない。

皆が感じる事と、悲しい気持ちに真に寄り添えるのは経験した者だと思うので、これからは自分の体験談を伝えていこうと思っています。

【優秀賞】

久保谷 喜枝子(くぼや きえこ) <茨城県>

『この笑顔なくさず生きていこう』



六十七歳の夏、肺癌が見つかり手術した。突然の現実を受けとめられず、私の心は砕け落ちた。

退院後も死への不安と恐怖で布団に潜り込むだけの毎日。死ぬ準備をしなくてとは家にこもった。

ある日、娘に「ママは眠っていても眉間にシワを寄せているんだね」と言われ、鏡を見た。笑顔をなくした無表情の私が映っていた。

突然、こんな私は嫌だと思った。夢中で顔を洗いクリームを塗って、鏡の中の私に向かい“にっこり”と微笑んでみた。なんて優しい笑顔なの。この笑顔をなくして私は何をしていたのだろうと呆然とした。

手術後九年が過ぎて受けた検診で肺に影が見つかった。でも私は怯えない、もう一人じゃない。癌になるのは生きている証だもの。

部屋の入口にある鏡の中の私に笑顔をつくり挨拶する。お元気？と。その笑顔をじっと見つめて、今日も元気で過ごせるから大丈夫よと魔法をもらう。一日一日を明るく大切に過ごし、時には涙している人の手を、この笑顔で優しく握ってあげたいから、ずっと、この笑顔なくさず生きていこうと思う。

【入選】

八木 宏昌(やぎ ひろまさ) <愛媛県>



『母ちゃんの笑顔』

わたしに胃ガンが見つかったのは5年ほど前。主治医の先生と話し合った結果、胃を全摘出する事になりました。その後すぐに、母にも胃ガンが見つかり、同じ病院で、同じ主治医の先生に手術を受けました。母と同じ病院に入院する事になり頻りに母の顔をみる事があり、笑顔でお互いを励まし合いました。母と同じ病気になったことで以前より絆が深まった気が致します。母はその後認知症になり、施設での車椅子生活をよぎなくされ、一昨年の暮れに病院で容体が悪化し、亡くなりました。わたしも、胃がなくなったので体重が20キロほど落ち、食べては吐きという生活が続いております。母は亡くなりましたがいつも側にいてくれる気がします。つらい時も、いつも笑顔を決やさなかった母の口癖が「冬は必ず春となる」という言葉でした。わたしもその言葉が好きです。母は亡くなりましたが、母と今でも一緒に生きています。

【入選】

福田 友里恵(ふくだ ゆりえ) <兵庫県>



『弱くて強い、母へ』

「転移してますね。」その言葉を何度聞いただろう。32歳になる前日に乳がんが分かり、その後もあちこち自由に飛び回る元気すぎるあなたに私は問う。「また来たんか」もう6年の長い付き合いになる。あなたがいたら本当に困ることがある。再発や転移を告げる度に母がひどく落ち込むことだ。何日も泣き続けて不眠になる。私は慰める。それでも母はみるみるうちに痩せていく。患者の私よりも病人のような顔つきになり、病院では勘違いした受付の人が私を通り過ぎて母の方へ向かう。子供の頃母は物凄く怖かった。今はこんなにも弱々しくなってしまったんだな、と心が痛む。母の小さな背中を撫でて慰める日がくるとは思わなかった。私がしっかり守ってあげなければ。私が元気にならなくては。母は弱いけれど、本来は強い。入院した時は1カ月毎日毎日1時間かけて見舞いに来てくれた。猛暑の中、たった30分間の面会のために。必死になって身体に良いものを探してくれる。しんどくて言葉がきつくなりしがちな私の肩を抱いて、大丈夫、大丈夫と励ましてくれる。親不孝でごめん。そして本当にありがとう。私は心から感謝している。今日も幸せだと伝えたい。